

すね。焼きものをしている人の中にも全道展の魅力を感じて、今年も旭川から15、6人の出品希望者がいるくらいですよ。

森田 それは期待できますね。焼きものの勉強を深めて、良い作品を出品して下さい。

高橋(武) やはり焼きものの造形性の追求の勉強は、当然必要だし、相互に批判し合って高い水準にしていきたいと思います。偶然性だけに頼らない勉強をどんどん続けて、後輩を引っぱらなければいけないでしょうね。

道北の出品者について

森田 旭川を含む道北の一般出品者についての話に移りたいと思いますが、高橋武志さんからどうぞ。

高橋(武) 工芸の方で、かつて油絵で出品していたマスガタ・ヒロヲ氏(旧姓亀岡)等は、基礎を踏んだ力を基に制作を続けていますし、一昨年受賞した佐々木さん、森山さんにも期待しています。

森田 神田さん、油絵の方はどうですか。

神田(一) 置戸町の福岡幸一氏などは版画、絵画両面に活躍して受賞しているし、活気に満ちているので期待しています。夏山氏も中央展にも出品し、気合いが入ってますよ。名寄の原氏も才能

のある人だと思いますし、高橋三加子さんは常連で受賞を続ける現役のバリバリです。佐々木治氏も迫力ある制作をしてくすね。



森田 そうですね。皆さんでくれた腕前の持主ですし、特に当麻町の

宮崎弘氏もはりきっているし、平間正造氏は勿論のこと、金沢実氏も中央展に出品する等意欲旺盛だし、それに版画では萩原常良氏が活躍中というところですね。

押川 厳しい審査を切り抜けて、道北勢の底力を示してほしいですね。移動展の再開を機会に、地元の鑑賞側の期待は大きいですからね。

神田(比) 彫刻の一般出品者について言えば、デッサンのある厳しい仕事をしてほしいし、工芸的に凝ったり、仕上げの意識にとらわれ過ぎる事のないように、純粋に造形性を追求してほしいでしょうか。

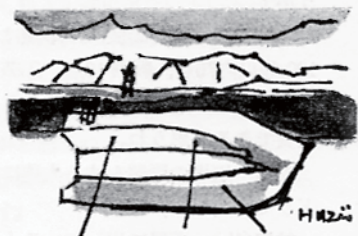
森田 そうですね。デッサンのある厳しい仕事という事については、全般的に言えることでしょうね。今夜は道北の全道展という事でお話を願いましたが、これで座談会を閉じたいと思います。お忙しい処、どうも有難うございました。

(記録 萩原常良)

1970

全道展地図

石狩・空知地区の作家たち



藤井 正

空知・石狩の大地は空漠として果てしない。その歴史は開拓の血と汗で築かれている。芸術の花未だ咲きほこらずといえども、今、着々とその地歩を固めつつある。

「空知集団 黒展」は、さしあたり、そこに蒔かれた貴重な一粒の種子とでもいえようか。まず、黒展について少々ふれてみたい。

1968年5月に結成され、第1回展を三菱ショールームで開いている。続いて第2回展を札幌大丸ギャラリーで

次いで美唄市内のデパートで、今年1970年は5月に時計台文化会館を借りて第4回展を持った。まだ誕生後もない若い集団である。結成の動機は「全道展のみならず北海道の美術界に新風を送る」という雄大なものである。その目的達成の日は遠い先のことであろうが……。

顔ぶれは、独自の風景画の世界を切り拓き、他に国展にも出品している森谷一(歌志内)を事務局に、叙情的作風で見ると人を楽しくさせている望月宣子(歌志内)、

力強い線が風景画にみごとに生きている本城義雄（歌志内）、モノクロームの画面が冴える石垣昌（砂川）、抽象の世界にとり組んでいる奈良孝哉（滝川）、重厚なマチュエールの早弓弘行（美唄）、行動展にも出品し、風景的心象世界を構成して意気ますます盛んの石井正二（美唄）——昨年末、東京で個展開催、更に、どっしりした画面を構築する長崎重定（札幌）、独立展にも出品し、目下七面鳥にとりかこまれている感の、鳥の構成に挑んでいる長谷由美子（岩見沢）——余技として日本の伝統折紙にも新境地を開拓している。それに、忙しい忙しいといいながら、一パイくみかわし芸術談議に花を咲かせるときには加わる藤井正（石狩）。年代も地区もまちまちであるが、それぞれ全道展のきびしさの前に浮き沈みしながら頑張っている。

さて、グループを離れてみると、岩見沢には渋い工芸に命を打ちこむ山岡三秋（会員）それに彫刻に異彩をは

なつ峯田敏郎（会員）続いて江別には版画の「人と樹」にとりくむ温厚な手島圭三郎（会友）が頑張っている。

ここで、話はちょっと横道にそれるが、札沼線太美鉄橋付近に本庄陸男の文学碑が建立されているのをご存知だろうか。映画「大地の侍」で有名になった「石狩川」の作者本庄陸男のことは文学にゆずるとして、この碑は彫刻部の山内壯夫（会員）の作である。そそり立つ一本の円柱の前に碑といろりを配し、血と汗の歴史をのんでゆうゆうと流れる石狩川を象徴するこの碑を訪れる人はまばらではあるが、まことに「人の命は短かし、然し、芸術は永し」の感を深くするものである。

全道展の各年度の出品者名簿をなつかしくそのページをめくると、石狩・空知には、会う機会に恵まれず、このらんに紹介できなかった多くの画友がいること思いこのことを甚だ遺憾としてこの稿を終りたい。

後志(倶知安・岩内地区)にいる 全道展のひとびと

谷 口 一 芳



1 活動母体とそのメンバー

昭20.9終戦をまちかねたように、郷土文化運動がおこり、木田金次郎、小川原脩らが発起人となって後志美術協会の創立をみて、昭21.11には倶知安と岩内で展覧会がもたれていて、全道展の創立や第1回展覧会と相前後している点、小川原、小野恒らかなり先導的役割を果たしていたようだ。

しかし、この地域活動の場も数年を経て消滅するが、岩内には16年前から岩内美術協会がつくられ、30回展も昨年に終え、その記念誌などは全道展にも比するできばえで、現在のメンバーは27名をかぞえている。

このうち会長の大地康雄をはじめ、長野襄、志津照男、大森亮三、穂井田日出磨、木滑邦夫、田丸公記が全道展の面々で、中心的役割を果たしている。

一方倶知安には麓彩会があって本年は12年目の展覧会を開くことになっている。この会長は小川原脩で、かつては小野垣哲之助、因藤寿、野本醇、坂口清一らが中心メンバーであったが、いまは18名となり、全道展では谷口一芳、徳丸滋、米沢邦子が4年前から加わり再び、活気を呈し、展覧会には岩内の全道展グループも参加して町の文化行事の一つになっている。

こうして倶知安、岩内地区の全道展のそれぞれは交流をはかり、さきには全道展後志グループ展を、地域関係者であった野本、坂口、井手むつ等も参加し、地域文化の発展に寄与している母体となっている。

2 全道展のひとびと

小川原脩 倶知安にアトリ

エをもつ創立会員、いぜん若々しく馬の連作で、東京、札幌の個展をつづける様子大学の講義以外は全くの制作三昧という近況。特にこの春は開拓の先駆者たちを赤レンガに掲額するので、与えられたテーマは「土族移住」で120号の制作では時代考証等に相当苦勞されたようであった。

徳丸 滋 帯広から42年に倶知安の拓銀に転勤、イカツイ身体はゴルフ、スキー、野球なんでもよくこなし、近郷での金あつめは自家用車で徹底した仕事をなすかと思えば、自宅に帰ると画を描くこと以外になにもしないというつわもので、受賞、会友と大いに張切っており、麓彩会の世話役で、コマメによく動いてくれるよい人である。

米沢邦子 後志地区の紅一点、高校時代は演劇クラブにいて、美術クラブに籍をもたなかったが、友達の影響で描きはじめ、全道展も常連になりつつ、大作をものにするのは電話局の非番の日とのこと、将来がたのしめる女性だ。

志津照男 倶知安小の先生、家は岩内で通勤の故か、会友になった頃のバイタリティーは失われて、一寸さみしい限りだ。行動展にも出品している力の持ち主、大いに発奮してほしい限りだ。

大地康雄 岩内高校の美術教師で、教え子が学生展に

どんどん出品するようにしたり、岩内美術協会の会長として中心的活躍を果しているエネルギーな人だ。独立展にも出品し、野性的な大作の二ツ折りも彼独自でマイカーで屋根につみ出品する会友で、岩内では個展も開いている。

長野 襄 岩内協会病院の薬剤師をつとめ、いわゆる岩内派でない人といわれ、地域での実質的な中心人物としてみんなの方から愛され、個展も開き会友5年目の人である。

大森亮三 岩内島野小の教頭先生、地区での版画家として知られ地元は勿論、道版画協会展にも発表している。会友4年目で、地域に版画の種を沢山まいてもらいたい人。

田丸公記 地区から一寸離れた歌で知られる歌楽中学の教師、受賞歴もある前途有望大いに精進してもらいたい人だ。

穂井田日出磨、木滑邦夫 何れもが学生展出身者で穂井田は岩内島野小の先生。木滑は岩内中学の教師をしている若手で、今後に期待がもてる人。

谷口一芳 札幌を離れて満3年すっかり倶知安の空気になじんだが、役人生活との調整がなかなか。一年余り前の手術後は、タバコ、麻雀、碁をわずれ、肉もつき、張切っているものなにかに追れている感もあるが、この地域でのスケッチブックは沢山になったのがなによりのよろこびとして、山、湖、海岸めぐりは休みの日課にしている。

函館地区会員近況

文責 三箇三郎



池谷 寅一 函館の街を見おろすアトリエから居ながらにしてと言うよりも窓から見えるものがそのまま絵になります。モチーフはいくらでも有りますからはりきっています。

岩船 修三 毎年2回は個展を東京その他で開催しています。絵描きは作品を発表すべきです……。眼光炯々最近は特に日本人ばなれしてきた風貌で語る。相変わらず酒はのみませんが酒のみのお相手は出来ます。

折原久左エ門 軽金属の流しこみをやっているのですが工芸はもっと理解されなければだめだとぼやいています。「陰の声」学校教育の美術の分野にも工芸の分野が大きく取り入れられて来ていますよ。しっかりたのみます。

金子 幸正 病院静養中です。

木村 訓丈 3月で先生をやめました。機会があれば東京近郊に転住するつもりです。先の事はわかりませんが、このへんで好きなようにやってみます。東京がだめならロンドン、パリだってあるさ。とにかくさっぱりしました。

高野 政志 昨年久々の個展をやりました。皆職をすてて画業に専念しようとしています、私は反対のことを考えています。

天間正五郎 私のことを仙人のようだと言っている者がいるがとんでもない。展覧会があればちゃんと見ている。若い人達はもっと良い仕事をしなければだめです。

長谷川 毎日色彩と平面と絵とは別の世界に時間を

とられてますが何とかしようと思っていますそのうち自分の仕事を発表したいと思っています。

平川 勇 パリに来て何年たったかな——日本の画家には手紙を出さない事にしています。「女性の画家は別です」日本に帰りたいと思いません。日本語を使う事はほとんどありません。日本の新聞社と女性にお便りする時は日本語を思い出します。ゴメンナサイ。

木村 良 森町に来てから2年以上になります。来年1月頃に個展の計画を持っています。酒をのむと元気が出ます。

酒無くて何のおのれが桜かな

東 政雄 近頃足が少々不自由ですが展覧会があると聞けばじっとしておれなくて出かけます。函館郊外のアトリエで静かに制作しています。

橋本 三郎 馬の連作をつづけています。一つのを追求することは大変な事なのです。フォルム画廊の個展は好評でした。近く出来る函館市民会館の緞帳の仕上りがたのしみです。幸に健康状態も良いので仕事にはあります。

花岡 今年は工芸の作品に良いのが出てくれれば良いのですが……せめて私の仕事だけでも良いものをと考えています。形成合板ととりくんでいます。

箱根 住所が時々変ります。何かやっています。函館に住んでいるのですが函館にはいないと思っています者もあるらしいのです。私の仕事

が変わったり住所がうつり変わるの絵を描く為
なのです。

鶴川 五郎 中央展に失望しています。とにかく自分の
為に良い仕事をしたと考えています。

天野 宮蔵 校長先生をやめて本当の絵描きになったよ
うな気が致します。ブロックをつんで自力
でアトリエを造りました。新しい家とアト
リエは制作意欲を引き出してくれます。少々若
くなりました。絵をかいて良かったと思っ
ています。

秋山 進 函館の刻み屋をまとめて毎年展覧会を開い
ています。こしばらく乾漆と取り組んでい

ます。一時若年性高血圧で弱りましたが今で
は元気はつらつです。御安心下さい。

三箇 三郎 10月に函館で個展をやります。「駒ヶ岳」
を主題に制作中です。移動アトリエ「特装ミ
ニユニバス」はすでに7千騎駒ヶ岳を50周し
ました。本人が書いているのだから本当で
す。

ところで他の皆様のは私が勝手に風聞をたよ
りにかいたので適当な所もあり気にさわった
らかんべんして下さい。

全道展室蘭地区のえかき点描

室蘭地区の全道展出品者はこのところ新人の顔が見ら
れないし常連でも落選の苦杯を喫している。これは全道
展の水準が年々高くなって地方展という甘い態度は許さ
れなく、むしろ中央展以上の厳しい場となったことも出
品者は心しなければならぬと思う。

しかし室蘭地区勢としてここ数年不調をかこつてはい
るものの絵画人口が徐々にふくれ胎動している。これが
今後に大きく期待を寄せるためには地区常連の活発な制
作活動による刺げきが大きく左右されるところでもあ
る。当地区の常連でもありまた中核と見られる画友たち
のプロフィールといったものを紹介するならば、ダンディ
も板についた高野次郎氏(会員)、1年間の滞欧生活は
ソップ型からアンコ型へと変えさせた。

このところ血色もよく旺盛なる画欲は今年4、5月と
立て続けに2回の個展を開いた。

その作品も本卦がえりの年を越したとは思われぬ若々
しさ、自分も楽しく、人にも楽しく、見てもらう作品
をと描きまくっている。往年は会社重役、市議会議長と
して活躍、現在は絵ひとすじ、酒はうまいし、酔えば
天国、という、ほかあ〜シアワセだなあ〜と言いたいと
ころだろう。

お年は25歳といつも同じ精神年齢の野本醇氏(会員)、
ついこの間まで「あごひげ」を生していたが自分の作品
に出てくる山羊のひげに似ていると言われ、「ひげ」に
合う服とか目鏡とかが気になり、また手入れもわずらわ
しいと剃りおとしてしまった。女性にはよろこばれる
「ひげ」だが絵筆には少々堅すぎるかといっていた。勤め
が文化女子短大なので大作はもっぱら学校の研究室、明
るく広い女生徒の「におい」をこの研究室で描くわり

熊谷善正

に画面の表情は無愛想だが
ドッコイ、スルメの味、現
代人が求めている静寂さと
画面上で哲学するといった
作風。

一見貴公子然とした西村徳一氏(会員)、マジメ人間
と思っていれば最近若い女性にモテすぎて困ると言っ
ている。遊び方をおぼえたのかな、彼の個展会場はもっ
ぱら喫茶店で女性ファンの多いゆえんでもある。

室蘭演劇研究会「四季の会」の会員で、喜劇役者がと
くいだと言っているが貴公子の喜劇役者は「ひげき」に
なりかねない。むしろ絵のモチーフになるのでは? 最近
4歳になる一人娘がアトリエに入って彼の制作に手を
加えて困ると言っているが、奥さんには俺に似て才があ
ると話していたようだ。

酒屋の主人太田実氏(会友)、最近前歯を全部抜かれ
往年の面影なし。だが好きな酒は歯に関係ないというわ
けで、ジョッキに安いウイスキーとビールのチャンポン
を満たし左手で一気のむびヤスキーなるもの最高だよ
と、アルコールが欄いっばいに並んでいてはまともな飲
み方は出来ないのだろう。

昨年の夏、別にアルコールが入っていたわけではないの
に釣の帰り自転車に乗ったまま埠頭より海中にダイビン
グ。あやうく「土左衛門」をまぬかれたが、口の悪い奴
が酒が入っている時が正常なのでは? と言っていた。
それでいて人望厚く町会長だか副会長だかやっているそ
うだ。世話好きらしい。

よく「咲山さん」と呼ばれる浅山咲知氏(会友)、当
地区切つての多芸家。謡曲は喜多流奥伝、ダンスはどこ



その会員、演劇は劇団大地に所属、5月に当市文化センターで公演された『東京の片隅』では悪都会議員の役をやったが、まさに適役で悪役にしてはバツグンの評判であった。そのほか盆栽、石集め、名石とまでゆかないが日高から神威古潭とあさり集めているコリよう。墓石？をたてるにまだまだのご年齢なのにと陰口をたたくものがいたが、こと芸術に関してはネズミのウンコみたい何にでもまじっている。あまり多芸なので彼の絵をやることを書きもらすところであった。

小学校の教頭、諏訪英雄氏（会友）、いろいろ悩みがあるそうだ。

暴力団の組長の家とは知らずに、子供のことで家庭訪問し組長と口論、焼酒のコップをぶつけられ黒い顔を青くしたとか。短歌を少々と、ごけんそんするが大したものらしい。何かと忙しいので絵画一本に集中出来ないとこぼすが、しかし牛歩のごとく理想を追いつづけて常に停滞なく進みたいと言っている。酒はのむ程に愉快になるが職業意識のなせるところ定量を守っている。

当地区で只一人の版画家北浦見氏（会友）、野本氏と同じく文化女子短大の先生、やはり研究室で作品を作っている。

最近色が明るくなったのは環境のせいばかりでなさそう。それにしても若いのにオツムに少々シルバーを入れてきた。若い女性群に囲まれての日々は余人のはかり知れない苦勞があるのだろう。板をほる以外に道楽がないと言う。ベニヤ板を彫って作った版画にベニヤ板でパネルも作り、椽までベニヤ板作品を送るときはベニヤ板ではさんで荷造り、ベニヤ板様々というところであろう。

無類の愛妻家石塚潔氏、最近ポンコツ軽四輪を新車に取り換えて以来通俗のカーマニヤになりつつある。休日には絵のことなど忘れてドライブに出かける。車の中に必ず奥さんが乗っている。安全運転はもちろんである。

一時肥満症になり顔の色つやもよかったので女性にもてたが、最近やせひなびてきたのでさっぱりモテナイと言っているが、そうでもないだろう。奥さんの手前うまいこと言っている。4月に輪西町の紅灯街から、住宅地の学校に転勤したが青い灯、赤い灯がなつかしくてストレートで家に帰ることのむなししいことよと言っている。

中学校の美術の先生佐久間恭子さん、最近人忘れがはなはだしいと言っているが、あなただあ〜れと、まさかご主人にまで言わないだろう、失言多謝。6年ぶりにこの3月個展をやった。ご主人と一緒に吹雪の中を作品運び飾りつけと仲睦まじいところを見せていた。正月はお二人でニセコヘスキー、最高でしたとのこと。閑静なお住いの窓からいつもお二人の顔がお庭を眺めている。四季おりおりの花を話題にしているのだろう。

51歳から絵をはじめて15年になるという三浦慶次郎氏、身体の不調をおしての絵の上ではすこぶる元気、い

つも画面に若々しさを見せている。昔は斗酒尚辞せずであったがいまは一滴もダメと、生活、そして人間関係にも心配がなくなったら病気に悩まされウマクいかないものだと言っている。

絵の中での生活が最高のよろこびで気分がよくなったなら是非一点でも全道展に出品したいと、絵画する情念に頭が下る。魅力ある人間『慶次郎さん』の健筆を祈る。

お嫁さんがホシイと工藤善蔵氏、酒やけのせいかもしれない赤い顔、女性の前でもいつも純情赤い顔、現代女性に純情派を理解する人が少なくなったと、ぼやいている。

純情を押しやりするみたいに純情、だから人の話にうたがいをもちつことを知らず、ご自分の話しが人にどう解されるかも知らない。

勤める学校の校長と酒のうえて口論、下宿人にとめられながらも素足で校長宅に行き辞職願いを出したが、その結果はまだわからない。ことし国展に初出品初入選のよろこびも辞職願いの件で頭にきていると、やはり純情な男である。

オトナシイ男本間常良氏、まともな顔をしているのにご自分では長い顔と言っている。細い眼、高い鼻が長い顔に調和しているよ、自信をもと今さら奥さんのいる男に無駄なことだね。70年にかけて神経質の画面を打ち破ると言っているが、それ程神経質でもない。4畳半の画室で100号に高い？鼻をくっつけての制作。全道展受賞まで道外の展覧会には出さないと、けわしい道でもある。

ドライとウエットを適度にミックスした男徳橋浩氏、フルーツは大したもの、札幌市民会館で演奏したこともある。

ただし唄はまったく駄目、酒の上では奇声としか聞えない。露出癖があり裸踊りと腹芸は天下一品、奥さんを貰ってからはあまり見られなくなった。ところで奥さんを貰う前嬉しかったのであろう、友人宅でのウイスキーだけでのみ足りず帰りに焼酎…バトカーで寮にご帰還、生涯消えることのない顔の傷痕は、その時の武勇伝を物語るものか？せめて4、5畳のアトリエ？でもあれば、と大作はもっぱら外で描いている。

ぼくのワイフ熊谷邦子、一寸テレクサイが絵の上では夫婦の座はないよと言っている。

昔はよくご主人の絵に似ていると言われてムクレていたが、ネコが嫌になくせに必ずと言ってよい程画面にネコが出てくる。

よくたべ、よく寝る、まるで女傑みたいに余裕がよくなって少々血圧が高いと言っているが気にすることはないだろう。

アトリエで木刀を振り回しての剣道ならぬ美容体操はイサマシイ。

他の作家は、会う機会がなく残念。元気でやっているらしい。

筆者熊谷は『アトリエ訪問』でどうぞ。

トマコマイ地区だより

遠藤 ミ マ ン 記



122

「ことは、油絵具のセットが飛ぶように売れます」とは、某画材店主の話。高校生をはじめ、一般主婦がうれしそうに買いにくるということだそう。描く人口がふえ、見る人口がふえるのは楽しいことだ。

この地方には、本年45回展を開く苫小牧美術協会が中心となって、美術振興の役割りを果たしてきたが、全道展のメンバーは、ほとんどこの会に入って活躍している。

適当な画廊がなくて困っていたが、一昨年市民会館(1,800人収容)が出来、その一部に展示室が設けられたのでまあまあ。一日の借館料5千円(冬季は7千5百円)だから、金をかけないでやろうと思えば、やっぱり無料提供の銀行や喫茶店の利用が多い。けっこう、どこかグループ展、個展が開かれている。

全道展の巡回展は、市民会館の小ホールを中心にして開く予定。会場設営が成功すれば毎年開きたいが、借館料7日で10万円かかるのが大きいね。

× × ×

さて、この地方、会員には、大友、福井と私、会友に鹿毛、能登、浅野、池本がいる。

大友は、浦河から移りすんでから数年たつ、すっかりこの地に落ち着いて、相変わらず、ボロきれをキャンバスに貼りつけたり、除いたりの仕事を続けている。5月上京の折、美術館で二紀選抜展が開かれていたが、2点出品で元気いっぱい。彼も上京して合評会に出かけた話を後で聞いたが、これも地方作家の修業のひとつ、年に1、2度は上京しての勉強は必要だなあ、金もかかるが、自分に金をかけないと太らないからなあ。大友紳士に続いでください。

福井は、穂別から同じ町内の富内に移った。あんまりマサナカ(田舎では焼酎のことを正中とかく、訓読みでマサナカとしゃれる)を飲みすぎて、カメをこわし、昨年11月、当市の市立病院に入院、一時悪化を伝えられたが、医師の手厚い治療を受けて(幸、この病院には、版画の浅野先生、油絵を描く金井先生などが居られ、画かきには天国のような病院?)無事退院。その間の脱出行は省略するが、命根性のない彼はやっぱりチビチビやるらしい。娘のひくシヨパンを聴きながら目下大構想を練っているとのことだ。

驚きは12月に入って、池本が入院した。病名は通称キ

ックラセンキ。彼はこの春からアーチェリー(洋弓)にこりだし、朝は5時に起きて猛練習、全日本の大会に出場するとかなんとかの話だったが、へんなものにこりすぎて、ざまあみろというところ。退院後もホルセット着用、絵を描くのに力が入らないで弱っている。つまらないことには手を出さなというゼッコウの見本。それでも会友賞を獲得するという野望を持っているところはいただけ。中央には国展に出品、受賞をねらっている。

そしてまた驚きは12月半ばに鹿毛が入院、自動車事故だ。彼は自分の車の窓に「お先へどうぞ」などと書いてはり出す位の慎重居士だが、相手にぶつけられてはどうしようもない。3週間程度のけがですんだが、愛車はメチャメチャ。一時死亡説が伝えられたが、今年に入って、HBCのテレビ出演で、奥様方と語るなど、彼の生存を天下に公開して先ずは目出し。さて彼の写実の絵に新鮮味がプラスするかどうか、乞う御期待!

全道展の三羽鳥がそろいもそろって厄介になった市立病院の版画の浅野は、只今、ヨーロッパ旅行中、多分学会とやらで、ドイツあたりにいったのだろう。全道展版画の中で、木版と取りくむ彼は、ヨーロッパの木口木版などでもじっくり見てきて、これまた新鮮な味を加えるかどうか。あるいはまた、みやげにヨーロッパ風景詩がとられるか。

次は山男、能登といこう。彼は43年夏、同志3人でカナダに遠征、カナデアノロッキー山脈の踏破に成功、今年に入って、日高山脈の縦走計画をたててこれも大成功、真黒な顔でかえってきた。彼のモチーフである雪とか氷とかは、みなこういう体験から来ている。こういう執念深さは貴重なものと言えよう。

ただこの地の会友陣、会友に止まる期間が長すぎるようだからという評判は早急に解消してほしいところだね。

× × ×

一般出品者は実に多い。これからもまた新人が続出するであろうが、常連から紹介すると、先ず、鈴木善公がいる。本名はヨシキミと読むが誰もがゼッコウと呼ぶ。中央では二紀会に所属し、春の二紀選抜展にも選ばれている。彼の絵には、いつも、こもかぶりの植木が登場し静かな暖かい画面が魅力である。

片桐勉は、余興では十数か国語をあやつることになっ

ているが、むしろ動物の啼き声をほん訳する方が得意で彼の画面に登場する「鳥の会話」などは、そんな一面を發揮したものである。

片桐と同様一度授賞したが、その後のヒットが出ないのが原田省吾、シュール風持ち味がおもしろいのだが、あと一息が出ないでいる。今年あたりはどうか、ぐつと出てきていい二人だ。

小野司は、一昨年洞爺から穂別へ。中央では中央美術展や創元展等に出品している。原野に馬や抜根をモチーフに叙情的な画面を作っている。

沼田卓のモダンな装飾風の絵、新鮮な感覚の持主だから、その表現を駆使する技術にもピリッとしたものが加わってほしいところ。

古い人だが鶴川の犬野重夫が、昨年、小野司らと三人展を開いていたが、カムバックの前ぶれか。

福井宏もいいセンスだったが、目下休眠。

多田襄二は、写実的ない腕を持っていて何とか写実で一派を開きたいと格闘中だ。美々庵という古風でしゃれた味の酒の店、食べる店を開いているからどうぞお立ち寄りを。

もう少し若くならぬと、

岡逸子の幻想詩的な作品はユニークだ。文学少女的な感覚を一層鮮明に押しだし、造形性を深めて欲しいな。中央では二紀に出品している。

菅原勇の単純化した厚ぬりの作品もどう深まったか。猛烈なファイトマンだ。

中橋靖彦は、最近、関西からきれいなお嫁さんを探してきて、制作どころではないらしいが、センスのいい男だから、そのうちまた新鮮な画面で登場してくるだろう。

酒井正勝の構成的な仕事も期待したいところ。

北山英昭(穂別)は、顔の連作で、今年も顔に牛や甲虫や蝶が加わり、100号を数点ならべてがんばっている。

彫刻には、小野健寿(早来)や、佐藤公毅がいる。地方にあつての独学はなかなか大変なようだが、とにかくコツコツやっている。

火山礫を材料として、壺の陶芸作品を作っている中丸茂平の比重は全く独特だ。今年もまた面白いものを見せられるだろう。

帯広・十勝の絵かき達

神田日勝



狩勝の峠を越えた、帯広、十勝はかつて内陸の平坦な土地柄を反映してか、画壇においても整然とした道展的秩序のうえに平安無事な幾年かが過ぎた。

しかし近年、そうした平安さのなかに微かな不穏な戦乱の様相がみえ始めたかと思う間もなく、またたくうちに暗雲におおわれ、今や帯広画壇は本格的な戦国の世を迎えてしまった。この地に君臨する野望旺盛な絵かき達は一国一城の主としての気骨を持ち、向気だけは滅法強い。自分を中心にして画壇が動いているのだとそれぞれが信じ込み断じて他を許さない。上下の関係などは全々通用しないし、各々が大将の気位いとチャンピオンとしての強気さを持ち合せているから愉快だ。会員だの会友だの一般出品者だのと古めかしい画壇の秩序はもはや完全に崩壊し、そこには傲慢な強気の激突だけがうずまいている。

絵かき達にとっては極めて棲息しやすい場所になって来た。ある時は、うらぶれたやきとり屋の片隅で安酒をくらいながら、又ある時はタバコの煙と騒々しいレコードの喫茶店にたむろして、自分以外のすべての相手の芸術をなじるのである。なじられた相手は額に青すじを走らせもって口ぎたなくやりかえす。

興奮のあまりコーヒー茶碗にタバコの吸いがらをはたき落とす。大袈裟なゼスチャアはカウンター上の安酒をひっくり返す、一張羅の背広に酒がぶっかかる、恥も外聞もなくあわててくちびるをおしあてこれを吸い取るあられもない姿……こうして新しい帯広的ムードは喧々囂々としたなかで徐々に熟していくのである。こうしたなかでの全道展作家達……。

野獣のようなファイター園部信二。これとは対照的な女性のような繊細な感覚とひそやかに執拗にキャンパスに食下がる岡沼秀雄。よきパパよき亭主天真爛漫な社交家渡辺禎祥。めったに顔をみせず無言のうちににらみをきかず富谷道信の無気味な存在。闘志を内に秘めた知的な男霜村英靖。日本人ばなれのした風貌と自由奔放な行動力を持つ村元俊郎。常に人間内部にテーマを探ろうとする真面目で素直なおおとひでお。典型的な素浪人はだの米山将治は数々の話題をこの地区に投げかける反逆児、自他ともにアウトサイダーを認める貴重な存在。教員生活2年目を迎えた若者斎藤健昭はこのところ、が

むしゃらに150号の大作に取り組んで、その若武者ぶりは
 壮快だ。

本別の辺地でひとり黙々と自我の世界を掘下げる斎藤
 隆博は非常にシャープな感覚でこの地区の異色作家とし
 て注目されている。最後に筆者神田日勝だが、このとこ
 ろ自身の力の限界を知ってか全く生気がない、にもかか
 わらず自尊心と傲慢さだけはひと並以上に残っているか

釧路市地区の近況

米坂 ヒデノリ

北海道第3期計画にのせて、釧路はいま、新釧路総合
 計画を策定中である。日本の経済や行政の大きな流れの
 中で、孤高を保つことはできぬことも知れぬが、しか
 しそれだからなおのこと、誰でもが住みたくなる魅力の
 ある都市づくりに、釧路の人々が懸命になっていること
 を伝えなければならない。

それにしても、未だに地を這うような海霧が晴れるこ
 となく幾日もつづくここ道東の釧路は、やはりさいはて
 なのだ。

数々の名作は、順風満帆の中から生まれたものよりも
 時代の矛盾を一身に集めた作家のものに多く見られるよ
 うに思われる。

とすれば、道東は将にその可能性を秘めた風土そのも
 のではないか、と考えたりする。

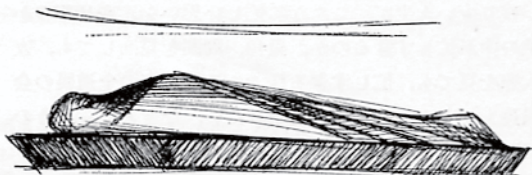
さて、出品者地図を展げてみよう。

油絵の部では、会員望月正男は教育大学釧路分校教授
 として後進の指導に当たっており、創元会会員。同じく会
 員川瀬敏夫は景雲中学校教員で、数年来の病気を克服し
 今年力作を発表。第3回展からの常連、藤村正豪は太
 平洋炭礦に勤めるかたわら、釧路市の成人学校で油彩指
 導をし、第5回展から出品の小向昭一は、鳥取中学校教
 員として共に地域の文化活動に熱意を注いでいる。中堅
 では、柳悟が国展の常連で牛の連作を発表、福井凱将、
 古川万洋、会田和夫、境信義、洪木弘志、白石富男らと
 共に教育大学釧路分校出身の教員である。村上稔は釧路
 ろう学校の教員、千葉光男は湖陵高校の教員と、教職に
 あることが制作に有利であることを物語っているよう
 である。

ら始末が悪い、没落寸前の侍の哀れさとも言うべき
 か。

以上誇り高さ全道展帯広地区の武将達が道展の諸作家
 達と入り乱れて今後どのように帯広画壇を推進していく
 ことか油断も隙もあつたものではない。

とりわけ全道展巡回展を目前に控えて、それはもうほ
 とんど殺気がみなぎっている。



変ったところでは、高野康平が浴場「高野湯」の御主
 人として、又、渡辺寿は工芸品製作の父君をたすけるか
 たわら制作に打ち込んでいる。川本ヤスヒロは教育大学
 釧路分校に在学中であり、学生全道展の常連受賞者。川
 口聡は今春教育大学を卒業した。新進気鋭の望月由美子
 は望月正男の息女で、今年創元展の会友に推せんされ
 た。

彫刻部では会員米坂ヒデノリが、釧路女子短大勤務で
 自由美術協会会員。釧路市の公職を2、3仰せつかって
 仕事ができぬと嘆く。会友の斎藤一明は釧路アトリエ彫
 塑集団の責任者として同好者の世話役をし、国展の常連
 である。最近の進境はめざましい。同じく会友郷みつる
 は、主婦業の合間を縫って制作をしている。彫刻のきび
 しさか、全道展の厳選が伝えられているせいか、一般出
 品者の続かぬのは淋しい。

水彩、版画、工芸部門に、全道展出品者がこの地区に
 居ないのも淋しいことだが、年輪の厚みが質を決定する
 要素とすれば、これらにもやがて優れた作家が輩出する
 のは間違いのないところであろう。

以上の他、道展、新道展関係者が居り、たがいに研鑽
 を積んでいる。

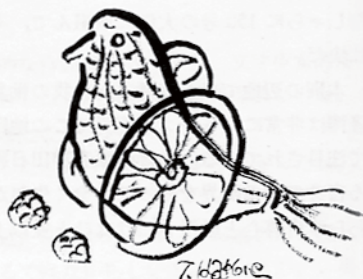
移動展に際し、超党派的な実行委員会組織ができたこ
 とは特筆すべきであろう。地域の文化興隆にセクトは必
 要のないことなのだ。

6千年の昔、ここには人類が文化の華をさかせたこと
 があつたのだ。「北海道は不毛」という偏見はもう棄て
 よう。

1970. 5. 15

東京通信

松島正幸



残り少ない人生が、こんなに忙しい思いを、させるのか世の中が忙しすぎるのか、兎角、周囲を見回しても、友人達を見ても、忙しすぎる様である。東京の全道展の会員達も、そんなわけて一度集りたい、などは、言うのだが果せぬのが現状だ。

そこえ事務所から、東京の連中の動向など書く様に速達が来て、あわてて電話などかけて、ごまかす結果になった。お宥しあれ。

○田中忠雄氏

行動展の25周年記念展で、色刷の豪華な画集を出す仕事や、野幌の開拓記念館のタピスリーのデザインを10月迄に描きあげるのと、道庁赤レンガの記録画など、すこぶる忙しい日々なの由。

○田辺三重松氏

ようやく体力も昔の様に回復、片眼は失ったが、心眼いよいよさえて、今年から又、ばりばりと仕事をする由。ただ前の様に独りで、何処にでも飛出す事が出来なくなったのが、いかにも残念らしい。

○前田政雄氏

2、3年越しの肋間神経痛、未だ全快せず、そのため歩行やや困難なれど元気の由。そのせいか好きなビールもこの所、酒量いささか落ちたとのこと。

○菊地精二氏

道庁内に掛ける開拓記録画の下絵作製のため、先日米北海道に行かれて帰られた所。

当時の資料少く、苦勞されてる由。

○小野州一氏

2月中旬、ギャラリー、ビジョンで、滞欧中1年半余の版画をまとめて、個展開催。

札幌でも4月下旬一部を展覧公開した。

○本郷新氏

旭川に建つ、風雪の群像に、2年越し取組んでいる。又、東京で最初の大きな個展を秋に開く予定。相変らず寸暇を惜しんで、釣りに東奔西走の由。

○山内壮夫氏

去年アトリエを改築したので、この頃ようやく落ついて、ぼつぼつ本格的に仕事にも力が入る様になった由。御期待あれ。

○北岡文雄氏

銀座の兜屋画廊で、5月下旬個展を開いた。6月下旬から、金沢美術工芸学校と富山大学で、版画の集中講義に出かける。今年は、3年ぶりで北海道旅行にも7月下旬には、出かけた由。

○西村喜久子氏

御家族が次々と病氣入院など、その看病のため、この45年制作も思う様に出来ず、又渡欧の予定も、ハワイ迄行って引返した由。

1日も早く、全快、すべてから開放されてもりもり仕事をし頂く様にお祈りする。

○三雲マリ氏

静かに御制作の毎日で、平々凡々特種もなしと笑われる。祥之助氏もお元気の由。

○佐藤忠良氏

九州の中津（福沢諭吉さんの郷里）で6月中旬、個展の由。昨年全道展は、忘れて不出品で失礼したが、今年出す由。

○小島真佐吉氏

何度電話をしても誰も出ない。アトリエを改築中の由で、近所に移られてる由。

○松島鈴子氏

この所、全道展不出品で申訳ないが、独立展にも大作の、それも立体的なものばかり出して、失礼してるが、来年こそ出す由。

○最後に、松島正幸（私）ですが、1月末から40日余鹿兒島に旅行、桜島を描いたり、久地、秋田など、遣唐使や鑑真和上の上陸地、密貿易の坊の津など、特に一乗院遺跡から（1380余年前建立と言う）発掘された縄文文化、弥生文化の土器、宝物類も一見に価するものです。坊の津は坊の浦とも言い、広重の版画でも有名です。古い歴史のある所を歩くのは、興味のあることで、日本文化の中国との交流など、南端旅行も薦めます。

4月から5月にかけて、北海道旅行、道庁の小樽築港の図の下絵のため、高島で、防波堤や残雪の街など描いてる間に風邪を引いたり、なかなか大変な仕事です。

引受けた以上、あんまり恥しくない作品に仕上げたく目下懸命に制作中。

描きあげたら、又しばらく渡欧して勉強する予定。

乱筆、乱文お宥しあれ°

1970.6.1 記